

自由：20

野生ニホンザルからのS I V分離の試み

村山 裕一

(予研筑波医学実験用霊長類センター)

昨年に引き続きニホンザルにおけるS I V感染について検討した。今回は高崎山の野生ニホンザルから採血を行い、C D 4陽性細胞（ヘルパーT細胞）を分離培養し、C P E（細胞変性効果、巨細胞を形成する）の有無を観察した。高崎山野猿公園のニホンザル18頭（A群11頭、B群1頭、C群6頭）から採血を行った。17頭はS I V抗体陰性であったが、C群の1頭が弱陽性であった。C D 4細胞分離後（純度は80-90%）、ConAとIL 2を添加して培養を開始したが、約一ヶ月を経過してC群の2頭にC P E形成が認められた。今回はS I V抗原の発現をH I V gag産物に対するモノクローナル抗体、VAK-4（久留米大、佐川先生より供与）を用いて調べた。この抗体はS I Vmac251、S I Vagmとも交差することを確認している。C P Eを形成したC群の2頭を含む計11頭のサル由来細胞スミアのVAK-4抗原の発現を調べたところすべて陰性であった。また同様に波勝崎のニホンザルについても検討した。抗体価は7頭、スミア標本中のS I V抗原は5頭について調べたが、血清抗体価、VAK-4抗原共に陰性であった。昨年霊長類研究所のニホンザルについて、S I Vmac251接種アカゲザル由来のS I V抗体陽性血清を用いて調べたところ5頭が陽性であった。同一サルのスミア標本のVAK-4抗原発現を検索したところ、すべて陰性であった。

H I Vと同様にC D 4細胞指向性を持ち、C P Eを形成するウイルスにH H V-6（Human Herpesvirus 6）がある。ニホンザルを含む各種霊長類がH H V-6に感染していることが示されている。VAK-4抗体の反応性の結果から考えあわせて、今回見られたC P E形成はC D 8細胞を取り除くことによってH H V-6類似ウイルスが活性化したためであると考えられる。エイズとH H V-6との関連が示唆されているが、S I V接種ザルではH H V-6抗体価が高く、そのため抗血清を用いると陽性と判定されたのかも知れない。なお、高崎山ニホンザル数頭から細胞株を樹立でき、これで免疫することによってニホンザル

C D 4モノクローナル抗体（U 7 b）の作製に成功した。

自由：21

各種霊長類におけるC型肝炎ウイルス感染の有無について

溝上 雅史（名古屋市大・医）

ウイルス性肝炎としていくつかのタイプが知られている。糞便が感染経路となっている、いわゆる流行性肝炎あるいはA型肝炎と、血清肝炎ともいわれたB型肝炎はよく知られている。これらは原因となるウイルスも同定され予防体制も整ってきた。このA、B型以外は非A非B肝炎ウイルスとして一括されてきたが、輸血にともなう肝炎感染防御のために一刻も速いウイルスの同定が望まれていた。

1989年新しい肝炎ウイルスが発見されC型肝炎ウイルス（H C V）と命名された。H C Vの進化および起源については現在まったく不明であるが、A型ウイルスが各種霊長類に感染し、B型ウイルスがチンパンジーおよびテナガザルに感染されることが可能である事実、さらにはC型ウイルスも実験的にチンパンジーに感染させることが可能である事実から、H C Vも各種霊長類に感染することが予想された。そこで各種霊長類の感染の有無を血清の抗体価の測定より明らかにすることを目的とした。

試料は霊長類研究所の放飼群から秋期健康診断時に採血した試料およびグループケージ、個体ケージで飼育中の個体である。測定はヒトC型肝炎ウイルスに対する抗体を用いたELISA法によった。各群れにおいて、平均値の3倍以上の値を示す個体を陽性とする、ニホンザルでは嵐山群（1/48）（陽性個体/検査個体数）、若桜群（1/57）、高浜群（1/91）、アカゲザルではインド群（2/53）、周群（5/52）、華群（1/48）であった。またグループケージのキャプチンファミリー9頭、ブタオザル、オランウータン、タイワンザル、パタスミドリザル、マントヒヒ、ベニガオザル、アッサムザル、ヨザル、パタスザル、ミドリザルはいずれも陰性であった。放飼群全体では349頭中陽性個体は11頭、約3%であり、ヒト集団での陽性率1-2%にほぼ等しい。また抗体価の高かったニホンザルが実験殺された際、肝臓の病理標本作